

前1千年紀の地方社会の庶民の生活と採石場址

—エジプト・アコリス遺跡の調査2022—

花坂 哲 筑波大学非常勤研究員
川西 宏幸 筑波大学名誉教授
辻村 純代 古代学協会客員研究員

Life of the Common People in Rural Society and Quarries during the First Millennium BCE: Akoris Archaeological Project 2022

HANASAKA, Tetsu Visiting Researcher, University of Tsukuba
KAWANISHI, Hiroyuki Professor Emeritus, University of Tsukuba
TSUJIMURA, Sumiyo Visiting Researcher, The Paleological Association of Japan, Inc.

1. はじめに

アコリス遺跡はカイロから南へ約230 km、ナイル河東岸を南北に連なる段丘上に営まれ、東側から北側をワディが取り巻いている(図1)。独立峰状に聳える岩山の北裾には、中王国時代の岩掘墓が穿たれ、プトレマイオス朝期やローマ時代にはそれを改変して神殿が建立された(西方神殿域)。岩山の北方には、ローマ・コプト期の日乾レンガ製の建物群址が地表面に露出しており、15 haほどの「都市域」を形成している(図2)。しかし、岩山の南側(南区)の発掘調査によ

て、第3中間期にはすでに都市としての体裁を整えていたことが推察されている(図3)。2002年に南区の発掘調査に着手して以来、居住した庶民層の生産活動や交易、信仰、埋葬など多角的に調査研究を進めてきた結果、衰退・混迷の時代として語られる新王国時代末期から第3中間期においても、地方社会に暮らす庶民層の活動は活発であったことが明らかになりつつある。ところが、このように活発な生産・交易活動も第3中間期後半には衰微し、南区の集落は過疎化し、次第に墓域や放牧地に転じていく。

南区の過疎化に合わせて、主要な居住域は岩山北側

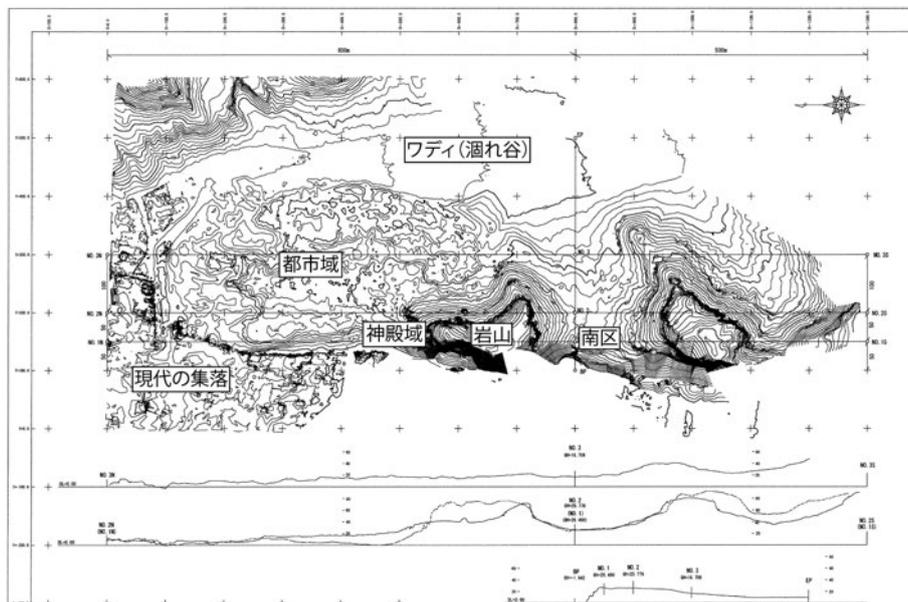


図1 アコリス遺跡等高線図



図2 岩山北側の都市域(北から)



図3 南区全景(北から)



図4 ニューメニア採石場址(Section T ; T1~T3)

の「都市域」に移っていく。遺跡近傍では、現在も数多くの石灰岩の採石場が操業されているが、「都市域」に暮らした人びとの経済活動を支えていたのも石灰岩の採石であった(図4)。とりわけプトレマイオス朝期の採石活動が活況を呈していたことは、岩面に残された作業記録の書き付け(グラフィティ)や、切り出し途中で放棄された巨大な柱やオペリスク、完成すれば高さ20mにも及ぶファラオ立像のブロックなどから明らかである。

2020・2021年度は世界的なコロナ禍により発掘調査を断念したが、2022年度は2022年8月上旬から2022年9月上旬にかけて、南区の南西端岩盤沿いでは集落址の発掘調査、採石場では書き付けの調査と3次元測量、また、かつて西方神殿域で出土した柱頭の調査をそれぞれ実施した。

2. 南区 南西端区域

遺跡南端に位置する南区は、河岸段丘が途切れた鞍部と、その南北に緩やかに上がる斜面からなり、近年の調査区域は南に向かう斜面の南西端である。今年度は、これまでの調査を継続する形で下層の遺構検出を目指し、層位確認用に残しているセクションベルトの東側と西側の2か所(2022東区と2022西区)の発掘調査を実施した。

層序関係、土器編年、建造物を構成する日乾レンガの大きさなどから勘案すると、南区南西端域の活動時期は大きく4期に分けることができる。すなわち、南区の集落が過疎化し、墓域となった最終期をI期とすると、2017・2018年度に検出した岩盤沿いに並ぶ部屋群がII期、2019年度に検出した下層の日乾レンガ列がIII期となる。また、詳細は今後の調査で明らかとなるが、さらに下層にも日乾レンガ列が確認されている(IV期)。出土土器の編年などから、II期とIII期は第3中間期に該当し、IV期は新王国時代末期まで遡る可能性がある。

まず、2022東区は、西側のセクションベルトと東側の既出住居址の間に位置する東西7m×南北15mほどの細長い区画である。すでに2010年度に表土を除去し、2015と2016年度に上層の調査を実施している(図5)。セクションベルトの西側の区画と併せて、一帯からはこれまでの調査で日乾レンガ壁がほとんど検出されていない点が特筆され、また、亜麻糸や撚りを掛ける前の亜麻植物の束、木製紡錘車などが多量に出土する遺物包含層と灰層が互層となっていることが特徴的である(図6)。これらの出土遺物の種類と量は、周辺に亜麻布の織物工房あるいは亜麻糸を撚る工房が存在したことを強く示唆するものであり、操業年代はII期に該当すると考えられる。

2022東区の西半と東半とでは堆積状況が異なっている。西半では亜麻関連工房に関係する遺物を多く含む堆積層がセクションベルトの西側から続き、30点以上の木製紡錘車や未焼成の大型の土製錘(ルームウェイト)が数点見つかった。亜麻布片だけでな



図5 2022 東区完掘後(南から)

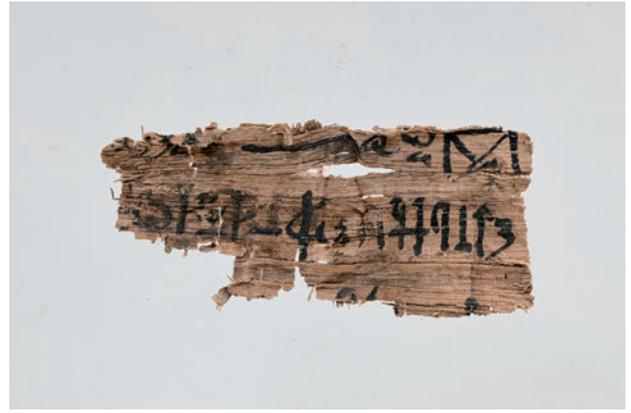


図7 デモティックで記されたパピルス片(2022 No.126)



図6 遺物包含層と灰層が互層となった堆積



図8 2022 西区完掘後(南から)

く、毛織物片も検出されることから、ルームウェイトは毛織物用に使われた可能性があるだろう。一方、東半は亜麻関連工場の遺物が乏しく、土器や獣骨を多く含む攪乱層であった。ただし、両者の境界は明瞭ではなく、また日乾レンガ列も検出されなかった。

2019年度の調査で、セクションベルトの下方に潜るIV期のレンガ列を検出しており、2022東区でその連続する日乾レンガ列の検出を目指した。しかし、日乾レンガ列は見つからず、南端部で大きな攪乱坑が検出されただけであった。深さ1mほどの攪乱坑は1mほどで岩盤に達した。一帯で出土する土器の年代は第21王朝に該当する。なかには、内面がややスラグ化し、銅粒が付着する坩堝と考えられる土器片や、土製支脚も含まれていた。また、出土した獣骨の動物種はブタ、ウシ、ヤギ、ヒツジであり、複数種の魚骨も含まれていた。攪乱坑はゴミ捨て場として設けられた可能性もあるが、そこに遺物が集中しているわけではない。

また、2022東区ではパピルス小片が複数見つかった。いずれもヒエラティックで記された書簡の断片で

あり、最大のものでも7.5 cm×3.3 cmであるため、内容の詳細は明らかではない。しかし、隊員の内田杉彦によれば、最大のパピルス断片には書簡の差出人と受取人、定型句の一部が残っており、その字体から第20王朝末のものと考えられるという(図7)。その他の断片も第20王朝から第21王朝に該当し、土器の編年とも齟齬がない。

次に、2022西区ではR4と呼ぶ部屋の下層を調査した。これまでの調査で、岩盤沿いに2.6 m×3.2 mの広さを持つR1と、2.8 m×3.8 mのR2の2つの小部屋を確認し、2019年度には下層のIII期に遡る日乾レンガ列を検出した。これらの小部屋と北壁に設けられた出入口によって繋がっているR4は4.0 m×7.3 mを測る比較的大きな部屋であり、露天の中庭だったと考えられる。R4の下層からも、R4を東西に二分するような南北壁(中央南北壁)が見つかっており、その東西で円形遺構を2基ずつ確認していた(図8)。今年度はこれらの円形遺構の内部を発掘し、用途および使用時期を確認することを目的とした。

円形遺構は東側のRS-AとRS-B、西側のRS-Cと

RS-Dと仮称する。RS-Aは内径2.5mほどを測り、R2の出入り口の正面に位置している。壁の基礎は岩盤まで到達しており、現存する壁の高さは最大で1.5mほどである。岩盤が南から北に向かって緩やかに下がっているが、床面に粘土や日乾レンガを敷いて水平面を作った痕跡は見いだせない。内部にRS-Aを構成していた壁が崩落しており、また、天井または床材と思われる粘土の塊も落ち込んでいる。RS-Aが機能を失ったのち、意図的に壁が破壊されて、内部を埋めるように破棄されたものと考えられる。RS-BはRS-Aの北東に位置し、内径1.4mを測るが、上層に攪乱抗があったこともあって遺存状態が悪く、壁もほとんど残っていない。

西側に位置するRS-CとRS-Dは、R4の北西隅にRS-Cが位置し、RS-DがRS-Cに取り付くように南接する。しかし、RS-Dはほとんど壁が残っておらず、大きさは分からない。RS-Cは内径2.0mほど、遺存する壁の最大の高さは90cmほどを測るが、日乾レンガの長手面を上下にして積んでいるため、周壁の厚さは薄い。周壁の基礎は岩盤に達しており、岩盤は南西から北東に向かって大きく下がっていく。岩盤は50cmほどの比高差があり、北東隅の底部では薄く粘土を敷いて底面を水平に調整している。粘土にムギの粒が付着していたことから、穀物倉庫として使用されていたと考えられる。

2022西区の円形遺構の周囲でも織物に関する遺物が見つかっており、木製紡錘車は6点、未焼成のルームウェイトも10点以上を数える。楕円形を呈したルームウェイトの完形品12点の大きさの平均値は、高さ11.5cm、幅8.8cm、厚さ5.0cmほどを測り、重さの平均は450g、重い製品だと650gを超える。そのため、細い亜麻糸に撚りを掛ける道具として適しているようには思えない。ルームウェイトを用いるような垂直織機(warp-weighted)は王朝時代には存在しなかったことが指摘されているため、エジプトにおける垂直織機の出現時期および糸の種類による錘の使い分けなどの検討が今後の課題として残るだろう。

注目すべき出土遺物として、Ⅱ期のR4の硬化面の下から出土した、長さ5.9cm、幅2.2cmほどの鉄片が挙げられる(図9)。周縁が鋸歯状になっているものの、厚みがなく、炭素含有量も低いと思われるため、利器の可能性は低いようであるが(※1)、理化学的分析を実施して原産地などの解明を進める予定である。



図9 出土鉄片(2022 No.232)

また、胎土の特徴からバハレイヤ・オアシス産と推察される巡礼壺(pilgrim flask)の破片も出土した。こちらも胎土分析等により詳細を明らかにしていきたい。

3. ニューメニア採石場址の調査

遺跡から15キロほど南方にあるニューメニア地区に近接して、プトレマイオス朝期からローマ時代にかけての大規模な石灰岩採石場址がある。約1kmに亘って南北に細長い溪谷状を呈した景観となっており、谷の両側に露天掘りや横穴式による採石の痕が残る。それらの壁面には、ギリシア語とデモティックの二言語で併記された「治世年・月日」、「人名」、「3つの数字」で構成される書き付けが残っており、プトレマイオス2世から4世の治世に大規模な採掘が行われたことが明らかとなっている。2022年度は、過去2シーズンに亘って調査してきた、谷の西側南端に位置するSection Nの調査を継続するとともに、谷の東側の南に位置するSection HとTの書き付けの調査と3次元測量を行った。

Section Tでは、天井までの高さが低い水平方向の横穴を掘り進めて採石を行っている(T1-T6)(図4)。なお、横穴は高い位置にあるため、現在はアクセスできず、調査ができない横穴も存在する。T4には書き付けが残っていなかったが、その他では天井面にデモティックによる複数の朱書きの書き付けを確認した。また、T6の開口部の壁面にはデモティックとギリシア語の二言語併記による書き付けが残っていた。

今年度の調査における興味深い発見は、採石したブロックを持ち上げるクレーンあるいはエレベーターのような装置を設置したと思われる痕跡である(図10)。T5上方の岩丘頂上面には、2m×3mほどの浅い窪み



図10 T5上方に設けられた装置の設置場?

があり、3つの方形ピットが穿たれている。おそらく器械の支柱を固定する穴だったのであろう。T4上方にも同様の長方形の窪みがあったが、支柱穴は確認されていない。装置の形状などは不明であるが、採石の最終工程である運び出しに関する知見が得られた点は大きな成果と言える。

4. 柱頭の調査

アコリス遺跡の岩山北裾は複数の岩掘墓や岩掘チャペルが残っており、元来は岩掘墓であったチャペルAやチャペルBがグレコ・ローマン時代に改変され、列柱室や参道が新たに加わり、神殿として整備されたと考えられてきた。後期ローマ(コプト)期に入ると、西方神殿域内に一般住居が建てられるようになり、聖域としての機能を失い、さらに、住居の建材として神殿材が転用された。そのなかにハトホル女神の顔を持つ柱頭があり、1980年代の調査で複数点発見され、出土時の状態のまま保存されていた(図11)。しかし、現状のままでは盗難の恐れが出てきたため、宿舍の倉庫に移管することになった。それに伴い、これまで未実施であった柱頭の精査を行い、3次元モデルを作成すべく写真撮影を行った。

今回移管した3点の柱頭のうち、大型の1点はハトホル女神の顔の下半だけしか残っていないが、小型の2点はハトホル女神の顔がはっきりと残っている。この2点は対となって見つかり、その大きさも近似している。ただし、一方の柱頭にはハトホル女神の顔が2面に彫られているのに対し、もう一方は1面にしか表現されていない。これらの柱頭の3次元モデルは作成途上であるが、プロポーションの比較による時代の決定や使用場所の特定が可能となるだろう。また、ウィルポー・パピルスなどの文字史料に登場するアメ



図11 原位置に残るハトホル柱頭

ン神殿は西方神殿にあったと見做してきたが、今回調査したシストラム型の柱頭は女神と関連するものであり、安岡義文隊員が指摘している通り、従来の見解を再考する必要もあるだろう。

5. 人骨の調査

南区南西端域では40基ほどの墓が見つかり、これまでに複数体のミイラに対してCTスキャンニングとX線撮影を行ってきた。今年度も2体のミイラについて、Minia Oncology Centerの協力のもと実施した(図12)。現在、隊員の辻村純代が専門家のアドバイスを受けながら、骨や歯の状態、遺存する内臓などからミイラの生前の健康状態や病歴などの分析を行っている。

※1: 辻村純代隊員を通じて鉄片の写真を見て頂き、愛媛大学・村上恭通氏にご助言を頂いた

■参考文献

- ・Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2020 *Preliminary Report Akoris* 2019.
- ・Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2019 *Pre-*



図12 ミイラのCTスキャンニング

liminary Report Akoris 2018.

- ・Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2018 *Pre-liminary Report Akoris* 2017.
- ・Kawanishi, H., S. Tsujimura and T. Hanasaka (eds.) 2017 *Pre-liminary Report Akoris* 2016.
- ・NPO 法人文化遺産の世 2021 『文化遺産の世界』 vol.39(特集アコリス遺跡が解き明かす古代エジプトの世界)。(https://www.isan-no-sekai.jp/list/vol39)

調査参加者(主な担当)

南区発掘調査：川西宏幸・辻村純代・清水麻里奈・土居紀子・花坂哲・和田浩一郎、採石場書き付け調査：内田杉彦・高橋亮介、採石場3次元測量：小川拓郎・森永拓光、柱頭調査：安岡義文、人骨調査：辻村純代